

白山ふるさと文学賞

第四回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 最優秀賞

## 星の数ほど感謝

鳥越中学校一年

結城ゆうき

壺政いっせい

僕の母は、一日の起きている時間の内、六割弱を書斎で過ごします。母は大学の教授で、毎日本を読んだり論文を書いたりしています。べ切が近づく、と、書斎にいる時間が長くなります。何の用事も無いのにふらつと書斎へ行くと、

「集中できんから出てって。」

と言われます。でも、これは、母のほんの一面です。僕の母は料理がたいへん上手で、栄養のとれる、ヘルシーな料理をつくってくれます。家族のことを考えて、心をこめてつくってくれた料理がテーブルにおかれた時、皆の口から、「ありがとう」の言葉が自然と出ます。

母の背中を見て育ってきた僕は、日に日に勉強に集中できるようになり、自分で栄養の取れた料理をつくれるようになりました。母は海外出張が多いので、母がいない時に家族の分の食事をつくるようにもなりました。また、家の手伝いをするようにもなりました。今では、皿洗い、ゴミ捨て、トイレ掃除などは、あたり前に行っています。いとこが家に来た時に皿を洗っていると、

「私、お皿洗ったことないよ。あんたら、すごいね。」

と言われました。僕はびっくりしました。自分はあたり前の事をしていただけなのに、すごいね、て。でも、小さいころから家事が出来る、と、将来困りません。だから、僕は家事をするのが当たり前になった事を、少しうれしく思っています。

僕が母と買い物に行く時、車の中でいろんな事を話し合います。僕の愚痴が多いのですが、今夜のご飯のメニューを考えたり、学校の話をしたりします。母と話している時は心がおちついて、いやなことをすべて忘れてしまいそうになります。そんな時、「お母さんって、すごいよねえ。」と思います。家事も仕事も完。べきにこなしてしまい、その上、一緒にいると心がおちつく。一度父にこんな話をしてみると、父はこう言いました。

「お前の母親は、ただものじゃない。」

と。僕は、すぐに納得しました。僕の将来の目標は、母のような人間になることです。その第一歩として、僕は自分出来る、「手伝い」をしています。

夏休みの後半に、僕は母に救われました。ある日突然、姉が吐き始め、体調をくずしてしまいました。父はアメリカへ里帰りしており、家には母と姉と僕の三人しかいませんでした。母はすぐに姉を病院につれて行きました。二時間ぐらいたると母がもどって来て、

「急性胃腸炎だった。点滴するのに一時間以上かかるから、お留守番お願いね。」

と言い、夜ご飯をつくり、再び病院へ向いました。三十分ほどすると、今度は僕が体調をくずし、吐き始めました。あと一時間で母が帰って来る、そう思いながら待っていました。しかし、母は一時間たっても、二時間たっても来ませんでした。姉の点滴が長びいたので。僕は気が遠くなりそうでした。四時間後やっと母が帰ってきました。とても疲れていました。でも、体調をくずした僕を見て、すぐに白湯をつくってくれました。そして病院に電話し、その結果、家から四十分も離れた病院に行くことになりました。この時には深夜一時ごろでした。病院で点滴をしている時、母がずっととなりで看病してくれていた事は、今でも忘れません。結局、家に着いたのは、次の日の朝三時でした。同時に起きたら良かったのですが、不運な事に時間差で起きてしまいました。それに臨機応変に対応できた母は、すごいと思えました。それに、二度も病院に行き、看病してくれた母に感謝したいです。そして、母が病気になる時、どうすれば良いのか、身の回りの人が急に体調をくずしたらどうすれば良いのかという事をじっくりと考えていきたいです。

僕はこれからも家族のために手伝いをし、母が仕事に集中できる環境をつくり上げていこうと思います。そして、母と話す機会を増やしたり、一緒にいる時間を多くしたりしたいです。皆さんはどうですか？全部お母さんにまかせていませんか？たまには、家事を手伝ってみてはどう

しょうか。良い「親孝行」になると思います。  
今まで母にできてもらった事を思い出してみると、星の数ほどあります。そして僕は今から、星の数ほど「親孝行」をしたいです。そして僕の目指す「母のような人間」になりたいです。ここまで僕を育ててくれた母には一年言い続けても言えないほどの感謝の気持ちがあります。お母さん、今まで本当にありがとう。そしてこれからもよろしくお願います。あなたは、僕の自慢の母です。僕は、お母さんが自慢できるような、立派な息子になります。

